



ネパールの人と自然

チベットに近いツクチエの町—後方はダウラギリ連峰 (8,000余m)

摂氏四十度以上という、暑熱のデカン高原北部をかすめて、ボンベイからの急行列車がヒンドスタン平原にはいると、暑さで朦朧とした目にも、なんとなく風景に変化が感じられる。

インド南部の赤茶けた地はだ、木や草の少ない荒地と違って変わり、北部の平野はガンジスの大河によって運ばれた沖積土壌が、ちょうどセメントの粉をふりまいたような色の農耕地となつて拡がっている。しかし、乾期のインドはどこも土ほこりをあげていて、それが暑さを一層きわだたせるものであった。

ネパールの南部、インドとの国境地帯は標高百—三百mという低いヒンドスタン平原の北縁をふくみ、いわゆる外テライ地方とよばれる地域である。この平原地帯は大部分が農耕地となつていて、イネ、サトウキビ、ムギなどが作られる。そして、その地理的位置や標高などから、住民もインド系の人がもつとも多く、そのため国境を越えてもしばらくは、インド北部とほとんど変わらない風景が連続している。

この平原が山にかかる少し手前から、テライのジャングルと呼ばれる落葉性広葉樹の広大な森林がはじまり、タール族と呼ばれる原住民の生活区域となる。この森林は、ヒマラヤのもつとも南側に位置するシワリク山脈(六百—千m)、およびその北側の内テライとよばれる平地まで連なり、その広大な林内には川や湿地などもあって、野生動物の豊庫となっている。とくにここはサイ、スイギュウ、トラ、ヒョウなどをはじめ、各種のシカやジャコウネコなど大形動物の重要な生息地である。

しかし、新興ネパールでは、国内にこれといった資源を

持たないこともあって、この森林資源とともに、もつとも生産性の高い南部平原地帯の開発は大変重要度の高いものであり、現在でもすでに、この森林の開発と農地化が盛んに行なわれつつある。そのため、将来これら大形動物の生息環境が減少し、絶滅ということも起こりかねないと思われるのである。

ネパールの南部にはこのように森林がまだ比較的良好に残っており、この地域では人口も多くない。しかし、さらに北部の標高千—二千五百mの山岳地帯まで登ると、ふたたび農耕地が開け、無数の村落が散在している。ネパールの人口の大部分が分布し、森林というものがほとんど破壊され、見渡すかぎりの斜面が段々畑として耕されているのが、この地帯の特徴である。ここでは、よほどの急斜面や岩山でないかぎり斜面は耕作されるのが原則である、といえるほどで、山の頂上まで、屋根の上まで農作物が植えられるのである。

一般に水の便のよい低所では水田が開かれ、モンズーンのはじまる六月ころには日本と同じような田植え風景が展開される。水利のよくない斜面や岩の多い畑ではオオムギ、コムギ、トウモロコシ、ジャガイモなどが作られる。ネパールでは主食としては米が好まれるが、高所においては米は貴重品となり、多くはムギなどの粉食が主体となっている。われわれはこの国での三カ月間をすべて現地食によつて過ごしたが、主食としての米や麦粉を買うのには、さほど不便はなかった。しかし、容易に手に入れたのが野菜や肉類である。

この国の一般庶民は、副食というものをごく少量しかとらない(現状ではとれないという)のが、本当かも知れない

永 部 阿



農村の掃除屋—ハゲワシの一種

が)し、それもトウガラシやニンニクなどで、間に合わせ
てしまうことが多い。カトマンズなどの町にいるかぎり
は、結構いろいろな副食類も手にはいるけれども、一歩、
町の外にでて山間部にはいると、それらは容易に手に入り
にくくなる。動物タンパクとしてはニワトリや卵を買いあ
さるか、あるいはヒツジや、ヤギを一頭のまま買うより手
はないのである。

この国にはヤギ、ヒツジ、ウシ、スイギュウなどの家畜
がきわめて多く、しかもそれらが山野に放牧されるため、
草木に対する食害はきわめてはげしいものがある。冬期に
は作物のない耕地や村落附近の林に放牧されるが、家畜の
数が多すぎるため過放牧の状態となり、草はなめたように
くいつくされる。そして、どの家畜も乾期には飼料不足と
なってやせ細り、雨期の到来とともに生長した草をたべて
急激に肥るのである。夏期には耕地に作物が植えられるた
め、家畜は部落より上の森林地帯や、さらには四千m附近
までも追いあげられ、そこで夏の間を過ごすのである。

このような状態が長年くり返されたため、この国では家
畜のたべない植物だけが繁栄し、現在みられる巨大なシャ
クナゲの純林などは、この植物を家畜がたべないためにで
きたものであるとさえいわれるのである。とにかく、この
国においては、低地の亜熱帯ジャングルはべつとしても、
標高千mくらいから上にある森林や草原では、家畜の食害
を受けないところはないといっても過言ではない。これが
ネパールの自然の大きな特徴の一つとなっている。

このような家畜のなかには、病気、その他で死亡する個
体も結構あり、それを餌とするハゲワシなどは、ごく普通
の鳥として農村地帯に生息している。

家畜はミルク、バター、肉、毛糸、皮などの資源となる
ばかりでなく、この国では重要な輸送機関ともなってい
る。低地とカトマンズ盆地を除けば、山の多いこの国には
ほとんど道路らしい道路はなく、もっぱら縦横にはりめぐ
らされた歩道を歩くことによって、人力や家畜の背が物の
運搬の主力となる。そのため、おもな街道では米や岩塩を
背にした、数十頭のロバやポニーのキャラバンにしばしば
出合い、そのたびに、行列が通りすぎるまで道をあけなけ
ればならないという経験をした。

また街道すじには、適当な間隔をおいてポダイジュの大
木が日蔭をつくる休息所が作られ、ちょうど一日行程のと
ころには宿場が開かれているため、旅人は気軽に、しかも
安い旅行ができるようになっていく。宿場は居酒屋も兼ね
ており、素泊り一泊一ルピー(三六円)というのが相場で
あるが、コップ一杯一ルピーのチャン(地酒)を飲めば宿
賃は無料という、じつに愉快なシステムになっている。

ネパール民族は多くの種族から成り立っている。しかし
一般に北部や奥地の住人ほど素朴で人情に厚く、われわれ
も安心してつき合うことができた。その意味で、チベット
系のシェルパ族などは顔つきも日本人と変わらないし、大
変親しみ深い陽気な人達であった。

このような人達に接するにつけ、岩村博士がこの国の人
々の健康を改善するため、一生をささげておられるお気持
ちの一端がうかがい知れる思いであった。われわれは人情
としても、これらの人達の生活向上のために、なにかをし
なければならぬという気持ちで自然に生まれたものであ
る。

一九六八年、北大中央ネパール生物調査隊員

(北海道大学農学部助教授)